

第2節 地域コミュニティが光り始めた

多様な自主的活動の展開によって 横浜の「地域」がますます活性化される

今、横浜の「地域」は

多縁社会の到来、個々人の価値観に基づく活動の多縁化は、社会の成熟化のなかでは必然的な動向と言えるが、人びとにとって地域の意味はどう変わってきているのだろうか。市政モニター200人に、地域の状況についてたずねてみた。

それによると、ほとんどすべてのモニター(95



あなたの身のまわりでもきっとさまざまなふれあいがある

%が、自分の住んでいる地域で、盆踊り、スポーツ大会、バザー、地元の神社のお祭りなど、何らかの催しが行われていると答えている。

最近5年間に市外から横浜に引っ越してきた人の回答では、「横浜のほうが地域の活動が活発だ」という人が46%、「変わらない」、「前住地のほうが活発だった」がそれぞれ25%となっており、横浜の地域活動の活発さを評価している人が多いことがわかる。

地域で行われる催しへの参加状況では、「積極的に」と「ときどき」を合わせて、87%のモニターが「参加している」と答えており、地域への関心の高さを示している。特に、居住区別に見た場合、新住民が多いと言われる郊外区のほうが参加の率が高いことは、注目すべきデータと言える。

また、ここ数年から10数年間の地域活動の動向について聞いてみると、約半数のモニターが「活発になってきた」と回答、「低調になってきたと思う」は10%にすぎない。

「最近新しく始まった活動があれば、自由にこ

記入ください」の質問に対しては、半数を超える人が記入。具体例として、「地域独自の新聞の発行」、「コミュニティ講座の開催」、「リサイクル」、「地域主催のコンサート」など、多彩なものがあつた。

多縁化のなかで、どうやら横浜の「地域」は活発に動き始めているようだ。

身近な施設が自主的活動を支えている

地域と自主的活動との関係を考える上で、興味深いデータがある。

教育委員会の調べた市内公共施設の利用状況を見ると、全市を1館でカバーする広域施設よりも、区域・地域を対象とした地区センターや区スポーツセンターのような身近な施設のほうが、学習やスポーツといった自主的活動のための利用がより盛んに行われているのである。

第1節で見たように、活動の広域化の流れがいつぼうにあるにもかかわらず、いやむしろ、だからこそ、市民はより身近な活動の場を評価していると言える。

ところで、市政モニターに「コミュニティ活

Network

動を盛んにするために行政に望むこと」を聞いたところ、次のような結果が出ている。

地域の催しに積極的に参加している層では、「集会所などの活動の場の整備」がトップで33%。いっぽう、地域の催しに現在参加していない層では、「コミュニティ活動のための情報提供や相談窓口をつくる」が最も多く、41%である。

より身近で使いやすい施設を、民間とも分担しながら今後とも整備していくとともに、適切な情報提供の機能も備えていくことが、市民各層のさまざまなニーズに応え、自主的活動を活発化することにつながると言えよう。そして、活動の舞台としての施設をさまざまな人びとが共有することが、新しい地域コミュニティの形成へと広がっていくのではないだろうか。

自主的活動の活発化がコミュニティを育てる

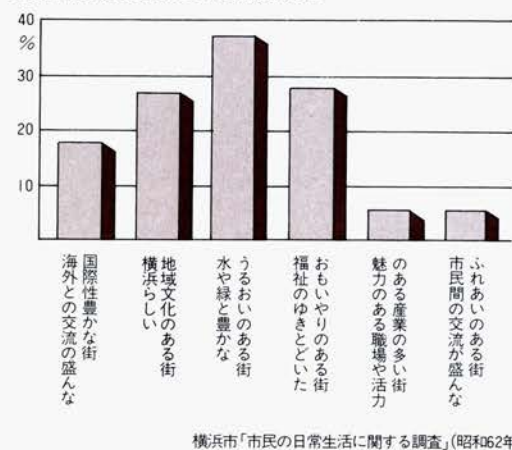
第1節で見てきたように、多縁社会の到来のなかで、従来の地縁的活動は必然的にその比重が低下する。しかし、それは人々の関心が地域から離れていってしまうことを意味しない。

経済企画庁の報告書(注)によると、自主的活動グループのリーダーの考え方は「地域がまず前提で、それをよくしたいから活動している」という人が20%に対し、「活動の目的や内容が先にある、それをたまたま現在の地域で行っている」という人が73%。ところが、活動を通じて得られたこととしては、「同じ地域に住んでいる人とのつきあいや、交流を深めることが

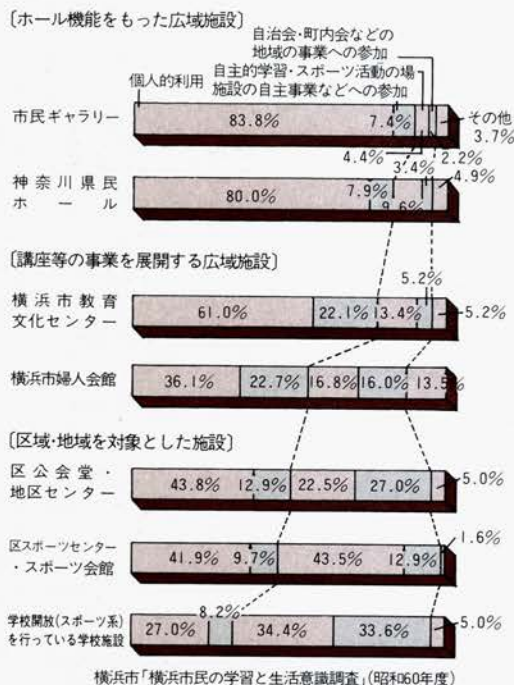
できた」ことを、80%近いリーダーがあげている。つまり、もともと意図していなくても、自主的活動は、人と人とのつながりを通して、地域の交流を深める役割を果たしているのである。これからの地域社会は、古い地縁を中心としたやや閉鎖的なものから、市民一人一人が自由に選択した、さまざまなジャンルにわたる活動やネットワークに支えられた開放的で動きのある地域社会へと変わっていくだろう。

■次代に伝えたいこんな横浜を

(注)「コミュニティ形成に資する自由時間活動の構造分析調査」(昭和58年度)



■自主的活動は身近な施設でより盛ん



■地域で行われるお祭り、運動会などの催しに9割近いひとが参加

